

夏目漱石

文学評論
序

文
学
评
论

序

この講義は余が大学在職中に作ったまま、長く放ってあったのを、春陽堂の乞こいに応じて今度公けにすることにした。はじめ出版の承諾をしたのは一昨年の夏のころと記憶しているが、原稿を浄書してくれる人にいろいろの故障があったのと、余の多忙なもので、つい延び延びになつてとうとう予定の期日を後おくらしてしまつた。去年の暮書肆しよしの催促を受けて、ようやく訂正に従事しだしてか

ら約一か月の間は専心この講義にばかり掛っていた。それで全部の訂正を終わったうえに約半分ほどは書き直したがそれでも余の意に満たぬところはたくさんある。

大学で講義をやる当時は、この式で十八世紀の末浪漫的反動の起るところまで行くつもりであつたが、半途中で辞職したため、思いどおりに歩を進めることができなかつた。この講義の中に評論した作者は、皆当代の大家であるけれども、あるいはその一人一人に費やした頁の数があまり多すぎはせぬかとの難もあるだらうと思う。しかし自分の主意は単にこれ等の諸家を論ずるのでなく

て、これ等の諸家を通じて、余の文学上の卑見を述べるつもりなのだからその辺は読者に断っておきたい。

この講義にはアデイソン、スウィフト、ポープ、デフォーの四家を評論してあるが、その評論の式は四家ともにおのおの態度を易えて多少の変化を試みてみた。その成功と不成功とはもとより余の云々すべき点ではない。

この講義を公けにするについて、森田草平、滝田樗陰両氏の補助を受けたのは余の感謝するところである。

明治四十二年二月

夏目漱石

日本文学電子図書館

文学評論——序

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第15卷」角川書店
昭和41年4月20日 5版発行

日本文学電子図書館